

# 土木の変と地方軍

——班軍番上の視点から——

川 越 泰 博

はじめに

- 一 事例の検出とその基準
- 二 親征軍と地方軍
- 三 地方軍と班軍番上との関係  
おわりに

はじめに

明代第六代皇帝英宗率いる親征軍が土木堡（河北省懷来県）で壊滅したという重大きわまる衝撃的な敗報が明廷の百官たちに伝わったのは、正統十四年（一四四九）八月十七日のことであった。それから数日間、紫陌（首都の道路）には、満身創痍で血に塗れた軍士たちが、足を引きずりながら、三々五々帰つて来るのがみえた。敗残の軍士が、続々

土木の変と地方軍（川越）

と引き上げて来るのを目の当たりにして、親征軍が陥った危難を信じない者は、だれもいなかった。英宗はモンゴル軍の捕虜となったが、それからちようど一年経った翌景泰元年（一四五〇）八月十五日に帰還したものの、英宗に扈從した高官と諸將の多くが土木堡で戦死した。親征軍については、『英宗実録』や『否泰録』に、「我が軍、遂に大潰す」、「死傷する者数十万」、「我が師、死傷する者半ばを過ぐ」とその惨状を記している。五十万と号する明の親征軍に、これほどの打撃を与えたモンゴル軍の兵力は、わずかに二万にすぎなかった<sup>1)</sup>。

中国史上前代未聞ともいべき、このような惨状を呈した明軍の敗北は、その地名に因んで土木の変という。かかる事態を惹起した要因の一つとして、親征が倉卒で無計画であったとみなすのが一般的に認知された理解である。

なるほど、七月十一日にモンゴル軍の対明侵寇発生の報がもたらされると、同日さっそく親征の議が起こり、十二日、出軍命令が下る。それに対して十四日吏部尚書王直等が親征反対を表明した。それにもかかわらず十六日には親征軍出發、というように、わずか五日後には、五十万と号する大軍が北京から西に向かつて進發した。このような過密的な日程をみれば、当然のことながら、一般的にいわれているような見方も成り立ちえよう。

しかしながら、逆に考えると、これだけの短期間に大軍を軍行させることができたのは、それまでに相当用意周到に準備がなされていたのではないかという見方もできる。

私はそのような観点から、一九九三年に發表した「土木の変と親征軍」という論攷においては、親征軍に含まれた在外衛所・在外衛所官の分析を通して、親征軍の基本的性格、とくに組成のあり方を若干検討した<sup>2)</sup>。そのときに考察・分析の典拠史料としたのが、財団法人東洋文庫に所蔵されている衛選簿であった。

衛選簿とは、衛所官の本貫・軍に就いた経緯・來衛経路・襲職時期・年齢・続柄・職の昇降等のデータを記載した登記簿である。衛選簿に軍功が記されているのは、陸進等に関連してであって、その陸進過程においての陣亡記事も多々あり、活動・戦役にかかわって陸進したのかを示す記述が少なくないが、その一方で戦役等においての陣亡記事も多々あり、その戦役を特定することが可能である。その記事を検討することで親征軍の組成の有り様を探ったのであるが、東洋文庫所蔵架蔵の衛選簿は十三種にすぎなかったので、やや隔靴搔痒の感なしとはしなかった。

ところが、それから十数年を閲した二〇〇一年に全一〇一冊からなる『中国明朝档案総匯』が刊行された。中国第一歴史档案館・遼寧省档案館編、広西師範大学出版社出版として印行された本史料集は、中国第一档案館に保存されている明朝档案をはじめ、大陸に現存する明朝を大量に影印したものである。本史料集の大宗をなすのは、故宮の西華門内にある第一歴史档案館に所蔵されている明代档案である。当該档案館所蔵の明清档案は、九〇〇万件を越える膨大な数量であるが、その内実はほとんど清代のものであり、明代のものはわずかに三六〇〇〇件にすぎないといわれている<sup>3)</sup>。明代档案は、清代档案の数量に比べれば、このように圧倒的に劣るとはいえ、全国に所在する档案が網羅的に集められて複印印行されたことで、明代史研究、具体的にはその史料環境の面において画期をもたらしたといっても過言ではないであろう。

明代の軍制史・軍政史の分野においては、衛選簿類が『中国明朝档案総匯』の第四九冊から第七四冊に収録されたことよって、明代軍事史研究を、より一層深化させる便宜をえたのである。

そこで、本稿においては、『中国明朝档案総匯』所収の衛選簿から関係記事を探り出し、それらを基本データとして、ふたたび親征軍に組み込まれた在外衛所・在外衛所官を抽出し、親征軍の基本的性格について論じることにはたいと思ふ。

以下は、その考察結果である。

### 一 事例の検出とその基準

明代軍事組織の骨幹をなすのは、衛所である。明朝の開祖洪武帝によって創設された、この国軍の中核をなす衛所制度のもとで、親軍衛・京衛・在外衛の三種類の衛所が全国に設置された。このうち、親軍衛と京衛は京師に置かれ、地方には在外衛が置かれた。親軍衛は、皇帝に侍衛にするので、侍衛上直軍ともいうが、専ら侍衛・宮城守衛・皇陵護衛・皇城巡察の任に当たった。京衛は、五軍都督府（五府）に隸属し、永楽朝以後は班軍番上する外衛とともに常

設的宮、すなわち京宮を組織するにいたつた。外衛は、軍事を掌る機関として地方に置かれた都指揮使司(都司)に統べられた。都指揮使司は、行政を掌る布政使司、司法を掌る按察使司とともに三司を形成し、地方政治の要をなした。その都指揮使司(都司)の上部機関は五軍都督府であり、都司は左右中前後のいずれかの都督府に隷属したのである。要するに、地方軍制の指揮系統は、皇帝—五軍都督府—都指揮使司—衛所ということになっていたのである。個々の衛所は、城守軍・屯軍・漕運軍などの軍種を保有した。さらにいえば衛所には班軍番上の義務を有するか否かの区別もあつた。この班軍番上軍、すなわち京操軍と呼ばれる軍種は、太宗永樂帝に起源する。靖難の役の勝利(建文四年(一四〇二)に終息)によつて明朝第三代の帝位についた永樂帝は、その二十二年にわたる治世の間(一四〇二—一四二四)に、大軍を率いて五度塞北に出で虜庭を犁くこと三度におよんだ。永樂帝のこれらの北征は、五軍營・三千營・神機營よりなる京營—いわゆる三大營を基礎に展開された。かかる行軍体制の中核をなす京營自体は、京衛と在外衛所の班軍番上軍との二者で組成されたのである。このように、京營組織の一斑をなした在外衛所の番上軍は、南北直隸・河南・山東・山西等の衛所から調撥せられた。班軍番上軍は、このように京營の組成・操練に参加するために番上するものであるから、これを略称して京操軍とも呼称した。京操軍は、毎年春戌と秋戌の両班に分かれて京師に番上した。これを上班といい、任務終了後の回衛を下班といつた。要するに、班軍番上<sub>II</sub>京操というものは、南北直隸・河南・山東・山西等の在外衛所の衛所軍が、京衛とともに京營を組成するために、春秋二班に分かれて、京師に番上する行為であつた<sub>(4)</sub>。

そこで、正統十四年(一四四九)七月編制の英宗親征軍に編入された在外衛所について衛選簿を探っていくと、本来班軍番上の責務がない在外衛所が多々含まれていることが知られる。これらを隈なく検出していけば、親征軍の基本的性格に逼る一助となるであらう。

なお、在外衛所(もしくは外衛)という用語は、親軍衛・京衛に対置する呼称である。本稿の論題に「地方軍」という用語を冠したのは、在外衛所のほかに地方に展開する軍事機関をも含んでいるからである。明代の国軍にあつては、北京以外の地方には、在外衛所のほか多くの軍事機関が存在した。それは、班軍番上の責を負わない王府護衛、

護陵衛、南京京衛である。本稿において、親征軍と地方軍との関わりを検討するにあたっては、単に在外衛所に局促することなく、そうした王府護衛・護陵衛・南京京衛をも含めて、考察の歩を進め、親征軍の編制の有り様を闡明するものである。

さて、親征軍に組み込まれて土木の変に殉難した衛所・衛所官の実態について、既存の史料では全く知り得ない。しかしながら、東洋文庫架蔵の衛選簿は、ごく一部とはいえ衛所名とその所属衛所官の事例を窺うことが可能であった。その事例を一举に拡充するに至ったのが『中国明朝檔案総匯』に所収されている一〇二種におよぶ衛選簿である。

それでは、親征軍に編制され土木の変に際会した衛所・衛所官について、衛選簿にはどのように記されているのであるか。これは、以下に掲出する「親征軍中地方軍関係表」はどのような基準をもって作成したか、という問いでもある。本表における「変時の様相」という項目において土木の変との関わりを示したが、それは、衛選簿にみえるつぎのような記述にもとづく。その事例を示すと、「親征軍中地方軍関係表」の「一 劉欽」に関して、『府軍前衛選簿』劉欽の条、四輩劉整の項に、

正統十四年十月、劉整、太原右衛右所征進未回副千戸劉海の親姪しんてつに係る。男劉源年八歳有るも幼小、本人借職して長成するを待ち還与す。

とあり、劉整の伯父にあたる太原右衛右所副千戸劉海が「征進して未だ回らず」、かつその子劉源は八歳と幼かつたので、劉源が十六歳になって世襲するに至るまで、親姪（兄弟の子）の劉整が一時的に世襲したのである<sup>5)</sup>。それが正統十四年（一四四九）十月のことであった。この世襲時期からみて、これはその二ヶ月前の土木の変において劉海が陣亡したのをうけての世襲であったことは疑う余地がない。

衛選簿には「征進未回」のほか「征進失陥」等、土木堡での陣亡を示した記事が数多みられるが、それらは正統十四年（一四四九）という紀年を随伴している。一方、「征進回還」等は辛うじて命を存え、京師にたどり着いたも

のたちである。表記には多少バラツキがあるが、正統十四年（一四四九）という紀年と「征進」を示す「征」という文字が一体化して表記されているのは、親征軍中の衛所・衛所官であるときみなしても註誤ない。この他、「土木陣亡」、「土墓陣亡」、「鶏兒嶺陣亡」等の表記は、直截に土木の変との関わりを示している。土木と土墓とは同じでも土木堡で戦没したことを示している<sup>(6)</sup>。「鶏兒嶺陣亡」は、土木の変が起ころ二日前に、東還中の親征軍が宣府を起とうとしたときモンゴル軍が追撃してきたので、英宗に扈從していた成国公朱勇と永順伯薛綬とが遣わされ、四万という軍勢を率いて邀撃したものの、鶏兒嶺でモンゴル軍の伏兵に遭遇し壊滅させられた戦いを指す<sup>(7)</sup>。

以上に示したような用語を基準に検出し作成したのが、「親征軍中地方軍関係表」である。本表に記載したほかの項目について若干の説明を加えると、頭書名は、親征軍に編入された当該人物ではなく、伝存の衛選簿が編纂された隆慶年間当時のその家の現職衛所官の名である。それが各衛所官家の見だし人名となっている。その下には、「内黄査有り」もしくは「外黄査有り」<sup>(8)</sup>の下に、その本貫・軍に就いた紀年と経緯と、現在の衛所に至るまでの移衛状況が記され、さらに各輩の項には明代末期に至るまでの世代ごとの襲職の時期、その理由、その年齢、続柄、武官職が陞進したか降格されたか等の記述がみられる。その形式を示す、【図】のごとくである。これは『中国明朝档案総匯』第四十九冊の五七―五八頁に掲出されている『府軍前衛選簿』劉欽の条を転載したものである。この図から知られるように、『中国明朝档案総匯』に収録されて印行された衛選簿は、実物そのものの、つまり実際に世襲交替簿として使用されていたものを複製したものであるため、あちこちに押印のあとがあり、また墨字の剥離がある。そのため判読したい部分が少なくないが、それぞれにその衛所官家の歴史が詰まっている一葉を読み解くことなしには、本稿の目的に逼ることはできない。このそれぞれの衛所官家の歴史が盛られた諸記事の中から、その家の本貫（出身）、土木の変時の衛名とその武職官、変時の様相、土木の変を挟んでの世襲状況、承継者の続柄、その家の掲載巻数とページを示した典拠の順番に摘記する。「1 劉欽」に関していえば、世襲が「劉海↓劉整」で、続柄を「親姪」に作るのは、親征軍に組み込まれ、不運にも土木の変において陣亡したのは劉海であり、劉海が就いていた太原右衛右所副千戸には親姪の劉整が世襲したことを意味する。

# 劉 欽

正 內黃 查有 別成是錄人有父劉欽字辰子州府嚴軍英武二年至平野子縣都督劉欽子欽後三  
十三年向港河金勝陸小旗三十四年天河大戰陸旗三十五年赴晉山則亡列無  
兇男前係祀求永業二年欽陸太原石衛石所副千戶三年欽到海隊到江備長男劉晉也係別  
海城長孫祖原府軍前衛衛隊進木回父劉原德於四牌樓殺賊有功陞正千戶故雷田前

化十年任文

一輩劉自陸 已載前黃

二輩劉成 已載前黃

三輩劉海 審稿 查有 宣德九年五月劉海係太原石衛右所世敵副千戶陞到海城縣

四輩劉整 審稿 查有 正統十四年十月劉整係太原石衛右所征進未回副千戶劉整親往有男劉源年八歲幼小未入借職除  
大成是錄

五輩劉源 審稿 查有 景泰五年三月劉源年十三歲係太原石衛右所夫婿劉千戶劉海城縣武職光同年幼叔祖劉整  
借職今告取職等 欽與使給五京泰七年任文

六輩劉竟 審稿 查有 成化六年四月劉奇兒年五歲係太原石衛右所武職子劉源孫劉竟  
任文

審稿 查有 成化十七年二月劉政太原石衛右所武職子劉源孫劉竟  
五年劉源孫劉竟

七輩劉江 審稿 查有 成化十七年二月劉政太原石衛右所武職子劉源孫劉竟  
崇禎內查有正德十一年十一月劉江系府軍前衛後所已故正千戶劉政孫長男

八輩劉欽 審稿 查有 崇禎二十四年二月劉欽年二十四歲係編入歸降軍前衛前所殺賊劉欽孫劉欽  
崇禎二十四年二月劉欽年二十四歲係編入歸降軍前衛前所殺賊劉欽孫劉欽

以上の諸項目を摘記した作成した「親征軍中地方軍関係表」は、以下の通りである。

土木の變と地方軍（川越）

【圖】『府軍前衛選簿』 57-58 頁

●「親征軍中地方軍関係表」

No.	頭書名	出身	土木の變時の衛名・職	變時の様相	世襲	承繼者の続柄	典拠
1	劉欽	息県	太原右衛副千戸	征進未回	劉海↓劉整	親姪	四九―五七
2	王登	通州	寧海衛百戸	迤北征進未回	王智↓王信	嫡長男	一一六
3	王鐘	宿遷県	孝陵衛指揮僉事	征進未回	王全↓王栄	〃	五〇―三〇
4	謝松	金山	德州衛副千戸	迤北未回	謝英↓謝福	親堂弟	四七
5	郭錦	山後人	薊州衛正千戸	征進未回	郭狗兒↓郭金	嫡長男	六六
6	趙孟家	江陰県	横海衛正千戸	〃	趙剛↓趙海	親叔姪	七七
7	孫振	淮安府	揚州衛副千戸	〃	孫敬↓孫祥	嫡長男	一〇三
8	杜福	海陽県	建陽衛副千戸	〃	杜貴↓杜祥	〃	一〇四
9	戚銳	江都県	西寧衛百戸	〃	戚賢↓戚貴	〃	一三四
10	陳英	豊県	揚州衛正千戸	〃	陳福↓陳旺	〃	二一〇
11	楊雄	山後人	開平中屯衛正千戸	〃	楊哈蒼孫↓楊昇	親弟	二二五
12	李天保	〃	鰲山衛指揮僉事	北進未回	李興↓李通	嫡長男	二九二
13	孫兒	〃	諸城守禦千戸所副千戸	征進未回	狗子↓孫兒	親叔	三三九
14	常江	〃	德州衛正千戸	迤北征進未回	常友↓常剛	親弟	三六〇
15	李貴	撫寧県	建陽衛百戸	征傷殘疾	李玉↓李能	〃	四〇三
16	劉璋	山陽県	龍江右衛副千戸	迤北征進未回	劉旺↓劉俊	嫡長男	四〇五
17	張欽	山後人	登州衛正千戸	征進未回	張斌↓張欽	〃	四二〇
18	李智		肥城守禦千戸所百戸	征傷	李隆↓李智	親弟	四八一



19	馬成龍	宿州	廬州衛指揮同知	征進未回	馬馴↓馬麟	嫡長男	五三三
20	宗心武	山陽県	沂州衛指揮同知	迤北未回	宗敬↓宗盛	〃	五三六
21	蘭五十八	山後人	已革常山左護衛指揮	征進未回			五六二
22	李鐘	〃	泗州衛指揮僉事	迤北征進未回	李貴↓李瓚	嫡長男	五八八
23	尹祥	〃	興州左屯衛正千戸	征進未回	千家奴↓尹能	嫡長男	五一―一八
24	魏虎	内黄県	杭州前衛副千戸	征北未回	魏義↓魏榮	長男	七〇
25	董榮	滕県	鞏昌衛正千戸	征進未回	董敬↓董榮	嫡長男	八六
26	徐壽	贛榆県	大同前衛指揮同知	〃	徐瑛↓徐忠	親弟	一五七
27	王大経	灤州	陽和衛副千戸	征傷	王勉↓王端	嫡長男	一六八
28	何錦	定州	常山護衛正千戸	征進未回	何興↓何清	〃	一八一
29	林蘭	閩県	揚州衛指揮僉事	〃	林叢↓林榮	親叔	一八九
30	象国紀	清河県	鳳陽中衛指揮僉事	迤北征進被傷	象能↓象通	嫡長男	一九三
31	劉文	定州	陽和衛副千戸	征進未回	劉貴↓劉文	〃	二〇一
32	劉宗仁	灤州	鳳陽中衛副千戸	〃	劉榮↓劉成	〃	二一二
33	林英	陽信県	陽和衛正千戸	〃	林福↓林榮	〃	二一三
34	山祿	山後人	大同前衛副千戸	〃	山名↓山祥	堂弟	二三九
35	劉良	楽亭県	〃	〃	劉旺↓劉傑	嫡長男	二四八
36	趙龍	陽信県	朔州衛百戸	北征未回	趙喜↓趙興	親男	二六〇
37	楊鎮	楽亭県	雲川衛百戸	征進未回	楊昇↓楊剛	親弟	二六一
38	李時	陽信県	鳳陽中衛百戸	征傷	李貴↓李順	嫡長男	二六二
39	寧文	山後人	雲川衛百戸	征進未回	寧興↓寧貴	〃	二六九

60	潘馴	通州	婦德衛副千戶	土木陷	潘興↓潘順	〃	一四八
59	韓保	魚台縣	陳州衛副千戶	〃	韓謙↓韓能	〃	一三九
58	周英	興化縣	高郵衛百戶	征進未回	周礼↓周英	〃	一二〇
57	韓鉞	豐縣	淮安衛百戶	征傷	韓旺↓韓敬	嫡長男	一〇二
56	潘霖	醴陵縣	汝寧守禦千戶所百戶	〃	潘順↓潘榮	親叔	九一
55	劉鎮	沛縣	潼關衛副千戶	〃	劉勝↓劉福	〃	八〇
54	丘椿	豐縣	信衛陽副千戶	征進未回	丘旺↓丘勝	嫡長男	七九
53	周鐘	永城縣	陳州衛副千戶	征傷	周旺↓周礼	親姪	七七
52	趙大經	濟寧州	〃 正千戶	征進傷故	趙成↓趙興	〃	六七
51	丁剛	〃	武平衛副千戶	〃	丁賁↓丁剛	嫡長男	五二
50	茅洪	泰州	揚州衛指揮同知	〃	茅興↓茅林	〃	五二—二三
49	周宝	〃	高山衛百戶	〃	周海↓周旺	親弟	三五〇
48	韓杰	武定州	鳳陽中衛百戶	征進未回	韓青↓韓福	親姪	三四七
47	張恂	定州	大同前衛百戶	迤北征進未回	張敬↓張礼	〃	三四五
46	鄭勳	錢塘縣	鎮朔衛副千戶	〃	鄭福↓鄭鴻	〃	三四四
45	吳存住	撫寧縣	高山衛副千戶	〃	吳亮↓吳敬	〃	三二九
44	張縉	大興縣	雲川衛副千戶	〃	張宣↓張原	嫡長男	三二六
43	孫春	霸州	鎮朔衛副千戶	〃	孫旺↓孫興	〃	三一—
42	李朝臣	灤州	〃	征進未回	李成↓李剛	親弟	三〇七
41	趙承慶	薊州	鎮朔衛副千戶	傷故	趙福↓趙雲	嫡長男	二九六
40	張卿	濱州	鳳陽中衛百戶	征傷	張忠↓張海	姪	二九四

81	陸添祥	高郵州	武平衛副千戶	征進未回	陸興↓陸広	〃	一五五
82	毛玉	泰州	弘農衛百戶	〃	毛福↓毛剛	親弟	一五九
83	顧大經	興化縣	懷遠衛百戶	迤北陣亡	顧斌↓顧文	〃	一六五
84	孫杰	高郵縣	弘農衛百戶	土木陣亡	孫忠↓孫能	親姪	一七〇
85	劉延壽	盧龍縣	武平衛副千戶	征進未回	劉斌↓劉鑑	嫡長男	一八三
86	蔣英	荊門州	陳州衛副千戶	〃	蔣智↓蔣春	〃	一八五
87	許鑾	応山縣	宣州衛正千戶	〃	許俊↓許剛	〃	一八八
88	馬宗礼	興化縣	陳州衛副千戶	〃	馬英↓馬裕	〃	二〇四
89	陳鑑	孝感縣	〃	征傷	陳鑑↓陳剛	〃	二〇六
90	李瓚	香河縣	弘農衛百戶	征進未回	李原↓李安	〃	二七六
91	許瓚	興化縣	信陽衛正千戶	〃	許進↓許原	親弟	二九九
92	王鵬	泰州	武平衛副千戶	〃	王浩↓王原	〃	〃
93	葛為	合肥縣	〃	土木陣亡	葛文↓葛成	〃	三一五
94	梅潔	桐城縣	潼関衛百戶	征進未回	梅春↓梅迥	〃	三三八
95	李経	滁州	埽德衛百戶	〃	李貴↓李剛	嫡長男	三四三
96	李通	山後人	登州衛副千戶	〃	李能↓李聡	親弟	三五二
97	李麒	〃	青州左衛副千戶	〃	李剛↓李紀	〃	三五四
98	王景輝	泗州	濟南衛副千戶	〃	王玉↓王興	親叔	三五六
99	馮万玉	武進縣	登州衛副千戶	迤北征進未回	馮聚↓馮宣	子	三六三
80	陳堂	福清縣	平山衛臨清所副千戶	〃	陳讓↓陳諒	親叔	三六四
81	蔡信	高郵州	濟南衛副千戶	〃	蔡興↓蔡輔佐	嫡長男	三六五

102	鄭堂	浦江縣	〃百戶	征進未回	鄭郁↓鄭瑄	嫡長男	二一七
101	王春	懷寧縣	〃指揮僉事	迤北征進失陷	王原↓王銘	親姪	二〇四
100	陶潤	壽州	長陵衛指揮使	征進未回	陶広↓陶鑑	嫡長男	一八二
99	張節	商州	甘州左衛副千戶	北征往來回	張斌↓張英	長男	七三
98	張龍	宛平縣	高山衛百戶	迤北征進未回	張友↓張鑑	堂叔	四九
97	楊玉	和州	鎮西衛指揮僉事	〃	楊忠↓楊俊	〃	五三一 一三三
96	田鸞	通州	濟南衛百戶	征進未回	田聚↓田勝	〃	五〇八
95	潘能	山後人	平山衛副千戶	征進	潘能↓潘信	〃	五〇三
94	鄭鵬	武清縣	〃	征傷	鄭友↓鄭全	〃	四八八
93	孟友良	永城縣	登州衛副千戶	〃	孟斌↓孟昇	嫡長男	四八四
92	馬仁	山後人	德州衛副千戶	征進未回	馬得↓馬林	庶兄	四八一
91	常忠	六安州	寧海衛正千戶	征北未回	常信↓常広	弟	四六三
90	王玘	山後人	膠州守禦所正千戶	〃	王榮↓王俊	親弟	四五一
89	龔欽	六安州	安東衛正千戶	〃	龔安↓龔輔	嫡長男	四四八
88	薛龍	山後人	靈山衛正千戶	征進未回	薛勝↓薛英	堂叔	四四一
87	丁鉞	大興縣	德州衛副千戶	失陷	丁貴↓丁信	嫡長男	三九二
86	傅全	山後人	威海衛副千戶	征進未回	傅貴↓傅全	庶兄	三八八
85	彭傑	湖口縣	德州衛副千戶	征進失陷	彭義↓彭孫兒	〃	〃
84	蘇塘	慈溪縣	平山衛副千戶	迤北征進失陷	蘇貴↓蘇增	嫡長男	三七一
83	黃英	山後人	登州衛副千戶	征北未回	黃興↓黃旺	弟	三六九
82	羅錦	贛縣	青州左衛副千戶	傷故	羅広↓羅鑑	堂叔	三六六